

『僕たちの第一歩』

八尾市立亀井中学校

3 年生（当時）八川 凌世

社会を明るく、と言われて考えを巡らせてみると。自分の考えがあまりにも漠然としていることに気づいた。

そこで明るくなった社会をまず想像してみることにした。非行や犯罪が無く、環境にも優しい社会が想像できない。

しかし、その理想に近づける第一歩として、身近なことに結び付けて考えてみようと思う。

まずは、人と人とのつながりを生む、小さな社会である学校からだ。ケンカや暴言などはめずらしいことではない。そんな学校生活の中で今後誰かが罪を犯すとは誰も思わない。

でも、社会に出て犯罪や非行に走る人達の多くは、きっと子供の頃は普通に暮らしていたと思う。幼い頃から犯罪に手を染めて、という子供は僕たちの知る限りではまれな存在だ。

では、今僕たちが受けている義務教育の期間にどんな予防ができるのだろうか。

一つは小さな揉め事から平和に解決していくことだ。

また、恐れずに注意できる環境であることも、明るい社会の第一歩だ。

次に、身近な地域の環境について、目を向けてみた。ごみのポイ捨てについてである。

僕はこれも立派な非行だと思うのだ。日本では、大きな行事ごとに、警察を出動させるほど盛り上がりを見せ、その際に大量のごみが発生する。

そしてそのごみが放置され、結局地域住民が回収することになる。

このことに関しては、一人一人の意識が非常に大切になってくる。「たかがポイ捨て」、「これぐらい構わない」と思ってしまうのでは、マナーの守れない、つまり非行に走りやすい人間になってしまうのではないだろうか。小さなルールを守ることや、自身に課された責任を自覚することで、過ごしやすく犯罪も起きない社会を実現できると考える。サッカーの日本代表がロッカールームをきれいに掃除して次へ引き継いだことと同じように、誰かを思い、互いに気持ちよく過ごせる環境を作ることは、最大の思いやりだとも言える。

それではすでに犯罪を犯してしまった人はどうなるのだろうか。やはり校正できるか否かが鍵となるだろう。僕に身近な話題ならば、学校で悪いことをして叱られた生徒は、大抵同じことを同じように繰り返しはしない。

しかし、気にせず非行を続ける人もいる。犯罪に手を染める人もこれと同じで、再犯で捕まったというニュースも少なくはない。では、更生し人の役に立つことをしている人は何が

違うのか。

人を思いやる心を持ち、我慢しながらでも社会のルールを守ることができるようになったかどうかだと思う。多くの地域の人々や真面目に学校生活を送る友達は、あいさつやマナーからごみ拾いなど、強制されなくても「人のためになる」という思いで快く取り組んでいる。

僕も意識せずとも人や社会を思って行動できる人になりたい。

ここまで考えてきたことは、全て一人一人の意識が大事になっている。自己中心的になるのではなく、小さなことから周りの思いを考えていく力がついていくと、明るい社会の実現が見えてくる。

突然この世界を変えることはできなくとも、小さな努力の積み重ねによって社会を動かしてきた偉人はたくさんいる。僕も改めて社会とのつながりを意識し、明るい社会を作る一員として、一日一日を大切にしていきたい。